

日本ロールシャッハ学会主催  
第16回ロールシャッハ  
研修会：大阪開催

第二報

日時 2024.5.19 (日)

時間 10:00-16:15

場所 エル・おおさか (大阪府立労働センター)

<https://www.l-osaka.or.jp/>

参加費 正会員6,000円/非会員7,000円  
大学院生2,000円



## プログラム

午前：分科会 10:00~12:00

A:スーパーヴァイザーは臨床事例の発表から何を学ぶのか (申込時事例発表者を募集します)

B:医療の現状に則したロールシャッハの活用法“あれこれ”

C:司法領域における心理アセスメントの実際

午後：全体会 13:15~16:15

ミニレクチャー (講師：川畑直人先生)

分科会振り返り (参加者、各講師、事例発表者)

全体討論

などを予定しております。

## 申し込み方法

下記QRコードのフォーム、あるいは  
<https://forms.gle/oBp1X5QxwbPXSHs1A>  
よりお申し込み下さい。

〆切：2024年4月20日 (土)



詳細は裏面をご参照下さい

第16回ロールシャッハ研修会準備委員会

🔍 [rorschach.osaka2024@gmail.com](mailto:rorschach.osaka2024@gmail.com) ✕

## 講師紹介

### 高橋昇先生 (愛知淑徳大学)

精神科病院、心療内科クリニックに従事後、九州女子大学教授を経て、人間環境大学大学院教授在任中に名古屋大学大学院博士後期課程短縮修了(2014年)。2016年より愛知淑徳大学心理学部教授。心理学博士。臨床心理士、公認心理師。

著書：「ロールシャッハ法と『穴』のある風景構成法の統合的活用」(金子書房 単著)、

「『臨床のこころ』を学ぶ心理アセスメントの実際」

(金子書房 共著) 他。

### 坂井新先生 (とじまクリニック)

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学

(医) 北斗会さわ病院、(医) 遊心会-副院長などを歴任。臨床心理士・公認心理師。とじまクリニック副院長、オフィス・トコトコ代表、南森町カウンセリングルーム所長、(株) epifunny company代表取締役

著書：『ライフステージを臨床的に理解する心理アセスメント』(金子書房 共著) 他

### 川畑直人先生 (京都文教大学)

1987年京都大学大学院博士後期課程中退。京都少年鑑別所、京都大学、天理大学を経て、2002年より、京都文教大学教授。教育学博士。臨床心理士。公認心理師。ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所精神分析家。同児童青年心理療法家。有限会社ケーアイピーピー代表取締役。

著書：『対人関係精神分析の心理臨床』(監修・共著、誠信書房) 他

## 分科会内容

### 分科会 A

スーパーヴァイザーの養成という位置づけです。臨床歴が長くなるに伴って、私たちは「終わりなき研修」に巻き込まれていきます。初心の頃から始まり、まだまだ不十分と感じ続けることが、より深い理解を到来させるでしょう。何が足りないのか明らかにすることが、より良いスーパーヴィジョンに繋がると考えます。ライブでそれを行い、初心者から熟練者の方とともに考えたいと思います。(事例発表者募集)

### 分科会 B

医療では実施することが少なくなったロールシャッハ法の、臨床現場に則した活用法についてお伝えします。例えば、認知症の精査で、簡易にロールシャッハがバッテリーとして組み込まれ、見方さえ知っていれば、幅のある鑑別が可能になり、現実には治療方針が覆る場合もあるでしょう。当日は、医療の現状を整理し、事例エピソードに則して、ロールシャッハ法の組み込み方や見方などを、具体的にお伝えすることで、皆さんひいては被検者にとって意味ある活用を考えたいと思います。

### 分科会 C

行動統制が極めて悪く、人格の偏倚が激しい性非行少年に対する矯正処遇において、ロールシャッハ・テストの結果を活用する道を探ります。はじめに、ロールシャッハ・テストの結果について、特に反応生成プロセスの分析という観点から検討を行います。その上で、少年院内での少年との継続的な面接を、テスト結果のフィードバックを含め、どのように進めていくか検討します。最後に、少年院における矯正処遇との連携のあり方についても考えたいと思います。

## 全体会ミニレクチャー内容

### 川畑直人先生「ロールシャッハ・テストはどのようなテストか」

短距離走と新体操を対比させるなら、ロールシャッハ・テストは明らかに後者に類似しています。子どものロールシャッハ反応を研究したLeichtman, M. (1996)は、このテストの本質は、曖昧刺激の知覚実験よりも人物描画検査に近いと指摘しています。とすれば、私たちは、スコアリングによって得られる数値を見比べるよりも、反応生成のパフォーマンスの吟味・鑑賞に力を入れるべきではないでしょうか。そのための鑑識眼を磨く工夫について考えたいと思います。

